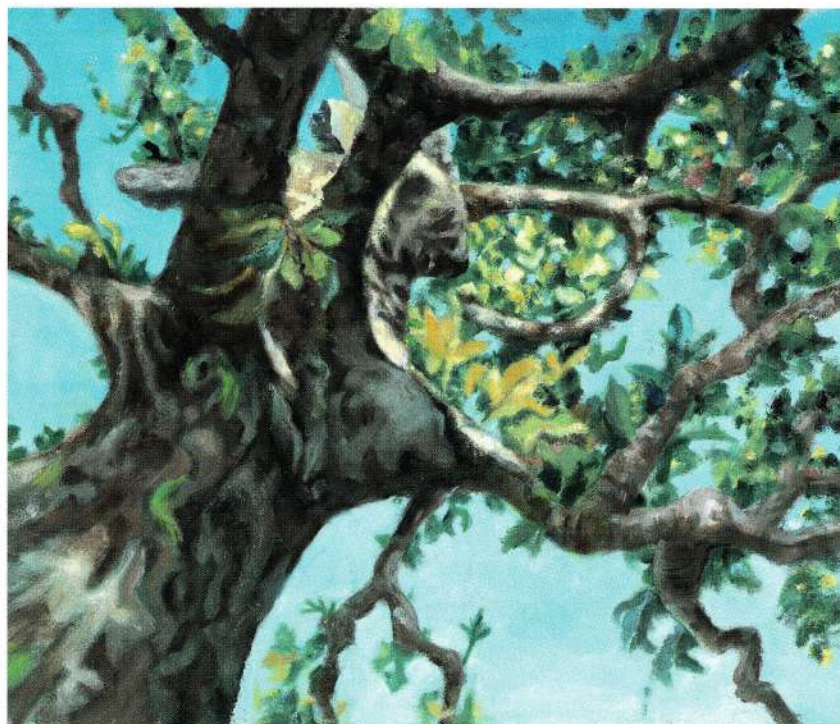


村野次郎創刊

# 香 蘭



2023年(令和5年)11月号

第 100 卷

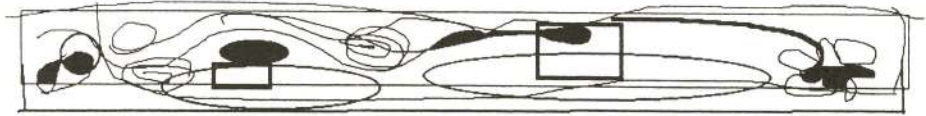
第 11 号

通卷 1115 号

二〇二三年(令和五年)十一月一日発行(毎月一回一日発行)

香 蘭

第一〇〇卷第十一号



# 香 蘭

2023年(令和5年)11月号  
第100巻 第11号 通巻1115号

## 目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(99) ..... 富田勝子 : 表二  
 招待作品 鴉 ..... 加藤英彦 : 2  
 作品 一 ..... 三  
 二 ..... 二二  
 三 ..... 三〇

### 推薦香蘭集

### 香 蘭 集

作品一 十首選(九月号) 高島 憲子選 ..... 16  
 作品二・三 十首選(九月号) 丸山三枝子選 ..... 18  
 一頁公論(30) もう一度訪ねたい場所——伊豆下田 ..... 15  
 村野次郎への旅(163) ..... 20  
 羊屋の回覧板(5) わが青春の太宰治 ..... 28  
 「香蘭」とともに(1) あたふたと ..... 29  
 私の読む現代短歌(22) 「象徴」を目指した雨宮雅子 ..... 42  
 エッセイ・自由研究 一葉の和歌 ..... 44  
 焦 点(九月号) 「一」のある歌 ..... 46  
 作 品 評(九月号) 作品一 ..... 48  
 作品二 ..... 50  
 作品三 ..... 52  
 香蘭集 ..... 54

### 七 首 抄(九月号)

### 耳言あれこれ(24)

### 緑 地 帯

田中・奥田(富)・中島(由) ..... 58  
 田中あさひ ..... 56  
 山中・岡・手島・稲葉 ..... 54  
 八木橋 洋子 ..... 52  
 市川 義和 ..... 50  
 川原 優子 ..... 48  
 桜井 京子 ..... 46  
 松 沢 みどり ..... 44  
 関 口 静子 ..... 42  
 田 中 あさひ ..... 29  
 鈴 木 桂子 ..... 28  
 河 野 慎二 ..... 20  
 千々和 久幸 ..... 15  
 沙 阿 羅 ..... 18

明宝研究会第一四二回 八月例会 短歌の履歴書 ..... 61

他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向 ..... 64

歌会及び会合・会員消息・他 ..... 67

編集後記・新宿日記 ..... 70

表紙絵 ..... 表三

中村 陽子「春ひかる」 目次・緑地帯カット ..... 和雄

村野次郎作品 私の愛誦歌（99）

わが家の門かどに敷きたる砂利の間に

照りて咲きたる松葉牡丹の花

『樗風集』

『樗風集』は「香蘭」創刊十五周年記念の一つとしてご自身が編まれた唯一の歌集であるという。

この作品は、『樗風集』の昭和十年、「盛夏雜詠」と題する十二首中、二番目に置かれている作品です。

わが家は、「松葉ボタンの家」と呼ばれており、道行く人が立ち止まって垣根の外からしばらく眺めてくださいます。

夫が毎年、それはそれは熱心に手をかけて咲かせているのです。

先生の「照りて咲きたる」との表現、何と確な美しい表現だろうと深く惹かれ、私の愛誦歌となりました。

（短歌新聞社文庫『樗風集』19頁に掲載。『村野次郎三百首』には収録されていない）

## 四選者の作品

孟蘭盆会

平塚 千々和 久幸

おお神よ復活などは信じないわれは誰にも祈らずに死ぬ

雨の朝卒然と湘南にわが死すと風に伝えよシオカラトンボ  
新盆会の読経聴きいる本当はオレよりおまえが聴く筈だった

さりながら供養の作法知らざれば万事は頑固に我流を通ず  
一人を彼岸へ送るに相応の手続きあるを知りて憐む

金ですむことなればとてあの世とも俗人根性で渡り合わんとす  
順調に進むかに見え中途よりてんやわんやはいつものこと

身はとうに盛り過ぎしと思いつつ旅先の湯に身を沈めいる  
漂いやすし 我孫子 丸山 三枝子

万華鏡まわす少女よこれの世に在りて無きもの美しからん  
ゆく夏の朝の食卓さびしげな供物のようにバナナ息づく

今だけは何も思わず疵のある木椅子に掛けてバスを待ちいる  
いつせいに鳩とびたちて敷石の一つ一つの影も消えたり

生き尽くしここに落ちしか山門の蟬のなきがら風に吹かれて  
私の大事は人の大事にあらずしてつくつくほうし榿の木に鳴く

かなかなは未だ鳴かざり法師蟬鳴かねばならぬ生きてるうちは  
山門の果てにぬかずく人も我もただよいやすし蟬声のなか

楯の木 東京 桜井京子

もうわれの手の届かざるところ行く青筋揚羽ふり向くなかれ  
呼び合へど姿をみせぬ雉鳩のその片方のこゑの気だるさ

「たぶのき」と札をつけられわたくしは楯の木なんだと疑はぬ樹よ  
裏庭にむしつても刈つてものがてくる戦草の花にも言ひ分あつて

約束は出来ませんがと土手道に握花咲けり涼しさうなり  
目覚めたら首のあたりを咬まれぬてきのふの夜の恋はおそろし

戦ひはここにはあらず夏まひる鉄砲百合がひとつ咲きをり  
木樅でも仏桑華でもなくアメリカ芙蓉大きいほどよい晩夏の花は

猫地藏 横浜 渡辺礼比子

五家宝を友と買いたり埼玉から（物売り）の来し昭和紅葉  
猫地藏に時間つぶせり二部授業午後組までをもてあましつづ

わが町に落合第六小建てり鉄筋校舎を眩しく仰ぐ  
わが実家を根城とせしか東京にაცოგれ抱くふるさと人ら

もと芸者と噂されいしタバコ屋の気丈の老いの子も孫も美女  
歩道橋も横断歩道もまだなくて目白通りは走って渡りき

来客は嬉しくまして手みやげの自由が丘（モンブラン）のケーキ  
その父は軍医なりとぞ友の住む軍人横丁と呼ばるる一角

# 作品一 十首選



(九月号作品から)

高 島 憲 子 選

・皆はいれ子も小鳥らも呼びよせて島の社の楠木茂る

岡野 甫江

何とも大らかな一首。読者の心まで広々とする。どここの島と特定せず、ある島の古いお社の大きな楠木であろうと想像するのがよいだろう。そのイメージは、民話か絵本の世界のようにだ。「皆はいれ」は楠木の言葉だろう。子どもも小鳥も対等に呼び寄せる。老若男女、風も雨も虫たちも、生きとし生けるものみんな入っついでいいんだよ、という広がりを感じる。島に茂る楠木の包容力は無限だ。

・人間は面倒くさい者ですぬ風呂の前にて猫が待つてる

柏原 陽子

面白いモノローグから入るユニークな一首。これは風呂を待つ猫のセリフとも、飼い主である作者の自嘲ともどちらにも取れる。(猫が入浴するかは別として。風呂場に入りたがるのは居る)人間は服を脱ぐ、下着を替える、やれ洗濯だ、アイロンだと忙しい。猫は着の身着のまま。化粧や歯磨きとも無縁。人間は実に面倒くさい。猫の目線から物事を見、可笑しくも皮肉がある。人間の面倒くささとは、そんな単純なことではない。笑った後、上句が苦く反響する。

・雷鳴を聞きたい午後だ 何かイヤ何かつまらぬ何かが欲しい

沙 阿 羅

何か、何か、何かと、どんどん口語で畳みかけ、何かを希求する切実な気持ちが強く出ている。作者の抱える鬱屈の具体はわからない。しかし、イヤでつまらぬ現状に抗う気持が、雷鳴を聞きたい、と叫ぶ。この雷鳴とは、自分を叱つたり鼓舞したり、励ます天の声でもあるのか。

・靴の底ばかり見てゐる露草は排水路より頭を出せり

関口 静子

この作者ならではの独特の視線がある。排水路の網目から頭を出す露草。日常、目にする光景であるが、その露草の側に立つて露草そのものになり、露草の目線で世の中を見ている。靴の底ばかり見ていると言われれば、読者も露草になり替わって、排水路の中に生えている気になってくる。

・交差路の人群の端を渡りゆく都会の初夏の一人となりて

手塚 春世

善段、都会ではないところに住まわれている方のように感じた。コロナ禍による自粛生活も緩み、久しぶりに都会に出てみた時の感覚、発見のようだ。もう街は、人も景色も空気も初夏の様相だったのだろう。交差路の人群の端にいるとき、「初夏の都会」ではなく「都会の初夏」の一人となっている自分を発見。都会の人間ではないが、たまたま今、都会のほんの一端を歩いている状況、心理が、下句によく表れている。自分も初夏の景の一粒。

・真夏日はやうやく暮れて吹く風に湯上りの首さらしてをりぬ

土井紘二郎

長かった真夏日がようやく暮れ、早めに風呂から上がって来た。夕べの風に吹かれるひと時の感慨を述べているが、ドキッとさせられる。下句の首。これが顔であったなら平穏な一首。ところが、首としたことで不穏となり一気に怖い一首となる。首さらして、というところはどうしても、さらし首、を連想させる。作者はそこまで想定したかはわからない。まるで罪人となつて、首をさらされていくような読みを誘う、不思議な一首である。

・待ち兼ねし演奏会にソプラノのドレスの襲より杖が覗けり

西野美智代

作者がずっと楽しみに待ち兼ねていた演奏会。舞台の花形であろうソプラノ歌手の、おそらくたつぷりとしたドレスの襲。その狭間に、ほんの一瞬、杖が覗いたという。日頃から足の悪い方だったのか、杖をつくほどの高齢ながら現役の歌手なのか。お若い方ながら、偶々、この日だけアクシデントに見舞われたのか。ちらっと見えた杖一本に様々のドラマが想像される。心優しい作者は、この舞台の歌手をずっと案じ、また、応援しながら鑑賞されたのだろう。物をよく見る、というより、気づいてしまう感度のよさに感服した。

・梅雨なれば日差し恋しく夏来れば秋待ちわびて今を楽しめず

宮口 弘美

文語調ながら言葉が易しく明快。結句が答え、とも言えるが、ピシヤツと言いつ切り、むしろ爽快。(自分のことなのだ)この猛暑に秋を恋う、はやむを得ない。梅雨時に梅雨を楽しむうなどとは立派な心がけ。実際、毎日降り込められたなら、日差しを恋うのが人情。無い物ねだりは誰しも陥りやすい。この人間心理を身近な例に言い当てた。梅雨のことだけを言う手もあるが、あえて梅雨と夏と二

つを挙げ、他の季節でもありうる例まで連想させる。一步踏み込み、人生の季節にも当てはめたくなる。人生二毛作という言葉のように、人に巡る季節は一回ではない。今を楽しめたら、は永遠の課題。

・首にかける水晶ひとつら冷たしと思うはいつも梅雨のこの頃

宮原 迪恵

水晶の一連のネックレスの冷たい感触、重みまで伝わってくる。梅雨の季節と水晶の取り合わせの妙。作者の体感がとてもリアルに出ている。この方は、梅雨の頃いつも、お気に入りの水晶のネックレスをかけて出られる行事があるのかもしれない。定点観測のように、いつもの同じ感覚が今年もわが首にあったのだろう。皮膚に感じる歌として、とても印象深かった。

・馬鹿野郎言はれて嬉しいばかりやう酒の肴はなんでもよくて

桜井 京子

漢字と旧仮名とで書かれた二度の「ばかりやう」。日本人の使う罵声であるが、小気味よく響く。この言葉、強い怒りや憎しみの際に放たれるが、ときに情愛もこもる。下句により、酒席か親しい人と酌み交わす場面であろうか。言われて嬉しいばかりやうもある。こういう時、肴は何でもよいのだ、あなたと飲めるならば。心地よいお酒に読者も酔う。この作者の一連の最後、「初夏の七草」とされた「庭石葛、虎杖、茅花、悪茄子、葺草、振花、藪枯の花」も取り上げたかった。またの機会に譲るが、一言。作者の遊び心と、それを読む側の楽しさ。ここには、掲出の馬鹿野郎の歌にも通じる自由闊達さがあり、短歌は愉しいものだなあと思わせてくれる。

# 作品二、三 十首選



(九月号作品から)

丸山 三枝子 選

・恋しさとせつなさと心強さと」とう歌聞きおればやさしさを問う

丑山 眞弓

「恋しさとせつなさと心強さと」は小室哲哉作詩作曲のアニメソングで篠原涼子が歌っている恋の曲らしい。この歌詞には「やさしさ」の言葉がどうして無いのか、恋愛には「やさしさ」も必要だろう、と作者は疑問を投げかけている。この曲の歌詞を聴きながら、自然と浮かんだ「やさしさ」なのだろう。いかにも自然な疑問がそのまま詠まれており共感した。どんな曲でもメロディーより先に自然とその歌詞の方に思考が吸い寄せられる、言葉に拘る作者であった。

小笹岐美子

「武者人形」から、端午の節句の一場面が想像される。数人の子等がはしゃぎ回って人形が持っていた「太刀」を折って了った。すっかりしよけている子等に、「いいよいいよ」と声を掛けて慰める作者が思われる。ここでは結句の「武器はいらない」で歌が大きく膨らんだ。人間の歴史は戦争の歴史と言っても過言ではあるまい。戦争のない、武器を必要としない人間社会に、と願う作者の反戦歌とも言えるだろう。正面きつて訴える反戦歌にも増して訴えるものがある。

る。永田和宏氏の絶賛した「千羽鶴、千人針」の歌が蘇る。現代を見る作者の基点は時事詠にあるのだろう。

・黒南風の鶴見川の上ひるがえりひるがえりゆくつばくらめはも

庄司 健造

「黒南風」は梅雨のはじめ頃に吹く南風だから、春先に飛来した燕の盛んな活動の頃。上手に飛べるようになった雛も交えての燕の家族が浮かぶ。叙景の歌は平板になりがちで読者を立ち止まらせるのは難しいのだが一読、この清々とした広らかな景に惹き込まれた。

空の語は使われていないけれども、晴れた日の初夏の天空をひるがえりながら飛びかう燕の歓喜の声までが聞こえてきそうだ。平仮名表記の、ゆったりとした五七のリズムが心地よい。

・親展の手紙を長くしまいおりいつか全てを忘れるのだろう

三浦 伶子

どんな人にも遠からず老いがくる。宛名人以外は開封できない「親展の手紙」を長い歲月、大切にしまっていた。誰からのどんな手紙であろうか。それは言わずもがな、聞かずもがなで先ずは作品の奥行きが限りなく深まる。そんな大切な手紙さえ、いつか忘れる日がくるのだろうか。その日はそんなに遠くないかも知れないとの怖れも垣間見える。手紙の存在を忘れることは、作者のこれまでの人生も「全てを忘れる」ことだと、下旬の独白めいたつぶやきが切ない。

三澤 幸子

「人」を広辞苑で繰ると、「サル目(霊長類)ヒト科の動物。現存種はホモ・サピエンスただ一種」とある。このただ一種の我々人間

の飽くなき欲望が豊かな自然を破壊して、地球温暖化や人心を荒廃させている、と作者は言いたいのだろう。人間の欲望は、便利な電気機器や快適な生活環境を生み出したが、一方で豊かな自然を破壊してゆく、人間の驕りはここまできたのだ。今に取り返しのでない事態になるのではないか、との危惧も感じられる。

・あの頃は石炭船を数えしが今はカモメが飛んでいるだけ

柏原 貞雄

作者の住む因島に歌会で伺っただけの私には手着かずの自然が残っている美しい島との印象だったが、島には島の歴史がある。この歌の前に、〈幼き日遊び場だった砂浜は今も変わらず波打ち寄せろ〉の歌があるから、「あの頃」とは半世紀以上前の頃と読んだ。当時は数えるほどの「石炭船」で賑わっていた砂浜。それを思い出し、詠んだ着眼点が良い。時代の推移がこの歌を生んだ。今は飛びかう「カモメ」がいるだけ。寂しくなる一方の島の過疎化を憂れう作者だが、この連作では感傷的に仕上げていない処に惹かれた。

・この月も歌会は雨となりました傘がいくつも立て掛けられて

川久保百子

前月も、或いは前々月の歌会も雨だったかも知れない。どうと言うこともないこんな当たり前のことも印象深い歌になる。分かりすぎた歌はつまらない、と切り捨てるのは簡単だが、分かりすぎて心がホッと解放される歌もある。一つの傘立てに色も形も違う様々の傘が立て掛けられている。しかしそれは「歌会」という親交の場であることに思えて私はホッとす。目の覚めるような歌ではないが、「傘がいくつも」がこの歌の力となっている。

・朝焼けの空を見てあつ 遙かなる戦ひの地へつづくこの空

澤田久美子

二句で転換して叙情的な歌に仕上がった処がいい。ここにこの歌の面白みがある。「朝焼けの空」は、夕焼け空とは異質の趣がある。太陽の光の当たる角度や時間や強度によっても違うのだろうが、一日の始まりと終わりの、見る者の意識の持ちようでも違ってくるだろう。適切な例ではないが、茂吉の「たかひは上海に起り居たりけり鳳仙花赤く散りてゐいたりき」(『赤光』)を思い出した。

「戦ひの地」で浮かぶのは、未だ収束の気配を見ないロシア・ウクライナ戦だ。

・ブランコであなたはあなただけを見てわたしはわたしだけを見て  
いる  
篠永 路子

「あなた」は作者の親しい人とも取れるが、そうでなくてもいい気がする。二人一緒の時も一人の時も、人は死ぬまでエゴイストなのだ、と言いたいのはあるまいか。親しい人と一緒にいて孤独だ、という歌は既視感があるが、そんな甘やかな孤独感を突き抜けたエゴイストチックな人間の存在をシニカルに捕らえた魅力的な歌だ。

・かろうじて平和を保つ国なれど人を危めるニュースの多し

矢口美代子

今年には太平洋戦争終戦七十八年目。七十八年間、かろうじて平和を保つ日本だが、戦争ならずとも一つしかない人の命や精神は大事にしなればいけない、と作者は言いたいのだろう。いとも簡単に人を殺したり、人の心を「危める」事件が次から次へと起こる現状だから。



# 加藤 英彦

## 鴉

春のそとへ走りだす子の白い脛がむこうの暗い路地に消えたり

いつ帰ってきたのと問われたくしの半生がまたざわつとさわぐ

なんの凶兆なるかは告げず嗚呼と啼きばさと羽搏ち鴉は翔てり

あたらしい生のががやき老母の目が庭に水のむ鶴にとまる

忘れてしまう早さのなかにも見尽くさむひかりの石清水 葱ぼうず

校庭の木陰に幼い手を引いてくれたね今はわが手にすぎる

草むらに仔猫がそつと吐き出だすものありかたちのなき闇ひとつ

髪は染めたくないと母は言った――

蓬髪のしろさを梳けば散りはじむわが狭量にふぶく桜は

坊主あたまがまたひとつ消ゆさつきまで垂乳根の膝にあそびていしが

今日のわたしは誰なのか親しげに笑みこぼしつつ母が寄りくる

「ね、あの子はどこにいったの」と聞くのが母の口ぐせである。「だれ？」と聞きかえずと、「さっきまでその階段に坐っていたでしょ」という。この古びた一軒家には、高齢な母と彼女を献身的に介護する母の伴侶とわたしの三人しかいない。毎週水曜に姉が夕食をつくって一晩泊まっていく他はだれも来ないのだ。東日本大震災の前日、あの震災禍を知らずに父はこの世を去った。あれ以来、朝食や夕飯のときになると母はさまってだれかを捜しはじめると、一緒に食卓をかこもうとしているのだ。ときには玄関の外にまで呼びにゆき、淋しそうな顔でもどつて来る。

それは幻視だと知っているわたしたちは、決して否定はしない。すこし前に帰ったよというのが常である。みんな家に帰って夕ごはんをお母さんと食べないと叱られるでしょ、でもまた明日には遊びにくるよ……というのがわたしたちのいつもの応答である。「ひとこと言ってから帰ればいいのに」などとつぶやきながら、あの子たちが戻ったときに食べるものがないといけないと母は自分の膳になかなか箸をつけようとしない。それは毎朝、毎晩くりかえされる。

ふと、わたしは思った。母のなかに棲んでいる子どもたちは、見えていないだけで本当はいるのではないか。名前もわからないけれど、あれは母の家族なのではないかと。この古びた一軒家には、そんなさまざまな子どもたちが遊びにくる。ときおり母は彼らと話をしているにちがいない。知らないのはわたしたちだけだ。

そう思いはじめたら、この母の家族を書いておかなければと思った。それは母にしか見えていないけれど、母のことばかりその一人ひとりを呼びだせるのではないかと思ったのだ。いま彼らを書き残しておかなければ、あの子たちはほんとうにいかなかったことにされてしまう。

今年、母は九十三歳を迎えた。夜になると伴侶の用意した電子ピアノを弾きはじめる。習ったことも譜面もよめない母は、それでも好きな十数曲を軽やかに、とても愉しそうに弾く。少女の頃、実家にはピアノがあったが母は弾くことを禁じられていたらしい。得意なのは古賀政男であり、母の記憶に生きている昭和の歌謡である。時折、弾きまちがえるけれど、あれは少女期の母の夢だったろう。

大正期の「香蘭」（二十四）

千々和久幸

前回到続き「香蘭」大正十五（1926）年十一月號を讀んでいこう。読者からもリクエストの多い前月歌壇合評の今月の評者は杉浦翠子、本間樂寛、深野庫之介、村野次郎である。

この山の岩の秀（秀）に立てる喇囉（喇囉）の塔壊（塔壊）えむ  
としつつとこしへ行くや

ささげえとうち羽ぶきつつ（カサガサ）鶴（カサガサ）らこの岩の  
秀を目がけ飛び來も 川田 順

（翠子）（一）のお歌のお心持は尊敬します。然し「とこしへ行くや」はとこしえに」と云ふにの助辭がなくとも良いのですか、「行くや」と云ふことは私は氣になります。然したゞそこだけの私の疑問であつて良い歌だと思ひます。

（二）のお歌も手がたいと思ひます。然し私は趣を違へて出されたのをかう云つては失禮ですが一の歌の方の着想より劣つてゐると思ひ

ます。結句の「目がけて飛び來も」を反つて

「目がけて飛びく、私ならば遣ります。何故ならばそれほど勇ましい場面を詠つた歌なのですから、「も」といふ味のありすぎる助辭はやめて、強く出たいと思ひます。私の考へは潜越（潜越）かも知れませんが憤り給ふな。

（樂寛）私はいつも川田氏の豪宕雄勁な歌詞を感銘深く讀んでゐる。いかにも大陸的風物を詠ふに相應はしい。此歌二首とも情景をよく現はしてゐるが、結句は吾々に首肯しがたいやうである。鶴（カサガサ）らのらも氣になる。

○ 月いさ、かうるみを帯びてくもらへり今宵海の音（音）の近う聞ゆる

のどかなる庭鳥（庭鳥）の聲をきかずして此いく  
月を都にありし 佐々木信綱

（翠子）（一）のお歌の「うるみを帯びてくもらへり」は心の花に流れてゐる一體の調子と

も云ふところでせう。「海の音近う聞ゆる」これも近くとしたいところが心の花調で私は白蓮夫人や武子夫人の歌は勿論のこと、文章の中にこの「近う」だの「低う」だのと云ふ詞を見つけては、成程上臈人だなどそのあてやかな振りをお慕ひいたして居ります。

（二）のお歌の「のどかなる庭鳥のこゑ」つまり「のどかなる」と云ふ庭鳥に對する形容で、その方の環境が全く解ると思ひます。

（樂寛）何となく帝展の日本畫でも見るやうな感じだ。それも第十五室あたりで、足の疲れを氣にし乍ら、ハハア綺麗な位で見過してしまふ繪だ、印象までがいたくばやけてゐる。私は歌にもつと生命の躍動があつてほしいと思ふ。（二）の歌、翠子氏評の如く、くもらへり、近うなど、いふ言葉を用ひ乍ら、第四句だけが妙にぎこちない。（二）の歌は『左様で御座いますか』といふだけのものではないでせうか甚だ失禮な言ひ草ながら。

○ この夜らを秋のなごりの蟲のこえ聞きつつひにいのちをはらむ

ガラス戸につきあたる蛾をあはれがり障子を  
あけて灯によらしめし 橋田 東聲

（翠子）この夜らを秋のなごりの蟲のこえ聞きつつひにいのちをはらむ

(翠子) (一)は「つひにいのちをほらむ」これだけのことをこんなに引伸ばしたに過ぎません。「秋の虫鳴きつ、つひに命をほらむ」を三十一文字にしなければならぬ短歌の使命も難い。これには、「秋のなごり虫の聲」を改作したいと思ひます。「つひ」と云う詞を一番うまく使はれたのは齋藤先生です。私も大分真似をしたがあ、はゆきません、「つひ」にといふ詞はそれほど先端的の詞で獨自性をもつて居りますから、「なごり」などと云ふ詞の助けがこの場合反つて「つひに」を屹立たせない邪魔物になると思ひますが如何ですか。

(二)は「飛んで火に入る夏の虫」といふことがあり、私などは橋田さんと反對に虫を外に追ひ出す方が彼の生命保健かと思ひました。(樂寛) (一)が流暢に歌ひのけてはあるが、上句と下句とに感情のそくはないものがある、氏は始めより秋の名残りと豫斷してゐて、而もついに命終らむと推定にしたのは何故であらうか。(二)失礼な申分だが、私にはこの蛾が非常に大きなものかと思へる丁度良寛坊が俺の軒下に寝てゐる乞食を室に引き入れて、まあ灯の傍へお寄りといつた形である。橋田氏の愛動物にまでかほどによるかと思へば忝

ないがあらはれがり、よらしめし等の言葉が誇張し過ぎるやうである。

○ わが座より間遠に見ゆる此寺の玄關口を人の來らず

ひろひろとあけ放したる此寺にすわりて居れば秋風の吹く 菊池 庫郎

(庫之介)「間遠に見ゆる」は「此寺の玄關口」に對して適確な言葉ではない様だ。五句も唐突過ぎて寧ろ人の來れる感ある如し如何。玄關口をのをも考へものだ。猶、獨立性に乏しい。

(二)私はずと「冬日かけ深くさしたる山のみ寺の量の上に坐りけるかも」といふ古泉千樫氏の歌を思ひ出した。(この場合、氏のお歌を引き合に出すのは何ともすまぬことであるが)そして菊池氏の歌に對しては、何も云ふべきでないと思つたのである。

(次郎)普通のこと普通歌はれてゐると云はふか。或る特異なものをこの一首から期待することは出来ない、作者も其で満足してゐるのだと思ふ。「間遠に見ゆる」はこの歌の重要な所であつて、寺の廣大さと静寂を相當に表はしてゐる。

(二)連作體の一首と云ふ氣がする。一體に説明的叙述であつて格調に聊か緊張を缺いて居はしまいか、また「秋の風吹く」も常套的であつて新味はさらにない。

○ いささかのひかり残りて夕雲の空にあらしのしづまりにけり

しぐれゆく雨の寂しさわくら葉のひと葉 大井 廣

(庫之介) (一)か行音の多いこと。一、三、四句のひかり、のこり、しづまりにけり、など、みさはりになつてゐる。そして而も、何のことがよくわからない歌ではないか。

(二)前の歌よりはいい。然し一二句は安價で下句は氣取り過ぎた。

(次郎)作者はこの境地を可成りよく感得してゐる、然し作歌するに當り調子のみに捉はれ感得した感情を出し切らずに終らしては居まいか。第一上句の意味が不鮮明である夕雲に光が残つたのであれば、「残りて」ではいけないだらう、次に夕雲の空の語も不安である。然し下句の情景はある同情者を有して居ると、思ふ。

(二)下句はもつとしつかり歌ふ方がよい。